二十世紀以来の中国文学研究文献目録の主要な成果

錢　振　民
西川芳樹（訳）

中国文学は文字がこの世に生まれる前から既に存在しており、中国文学の研究もまた長い歴史がある。だが、新しく興った学術分野としての中国文学研究の発展は二〇世紀初頭より始まる。新世代の中国文学研究家は西洋の近代文化思想を吸収し、斬新な理念と視点を用いて中国文学を仔細に見直すことにより、中国古典文学研究の各方面で大変すばらしい貢献をした。中国では、王国維、魯迅、胡適、陳寅恪等、一代の文学研究の大家が現れた。日本では、狩野直喜、鈴木虎雄、塩谷温、青木正兒、吉川幸次郎等の大家が優れた貢献をした。文学研究文献の収集整理作業も中国文学研究の発展と共に一定の成果を挙げた。その状況はおよそ以下の通りである。

内容からいうと、研究文献目録は大きく二つに分けることができる。一つは関連する総合文献目録である。関連する総合文献目録とは人文、社会科学の各分野の研究文献を収録している文献目録であり、中には自然科学の各分野の研究文献さえ収めている文献目録もある。中国古典文学に関する研究文献は目録全体のほんの一部にすぎないのであ

る。例えば『東洋学文献類目』、『雑誌記事索引』、『日本中国学会報』の「学会展望」、『全国報刊索引数據庫』、『復印報刊資料索引数據庫』などがある。二つ目は専門文献目録である。これは中国古典文学に関するもの、或いは中国古典文学を中心とした研究文献を専門に収録している文献目録である。例えば『中国古典文学研究論文索引』、『中国文学研究文献要覧（戦後編）』、『中国文学論著集目』、『日本国内詞学文献目録』、『詞学論著総目』、『日本清末小説研究文献目録』などがある。

形式からもまた大きく二つに分けることができる。一つは伝統的な紙媒体のものである。先程挙げた多くの文献目録は、ほとんどが紙媒体のものである。二つ目は電子媒体のものである。コンピューター技術とインターネット技術の発達にともない、各種の書籍・刊行物の電子媒体が猛烈な勢いで発展した。文献目録もこの流れに乗ったのである。近年、インターネット上で中国古典文学と中国古典文学に関連する研究文献目録をいつでも見ることができる。例えば、『日本国内詞学文献目録』、『復印報刊資料索引数據庫』などである。次々と刊行される文献目録には、紙媒体と電子媒体の両方で公開されるものもあれば、きっぱりと電子媒体のもののみを公開し、紙媒体のものは作らない文献目録もある。前者は例えば『東洋学文献類目』である。一九八七年より、一方では従来どおり、毎年一冊、紙媒体のものを出版し、一方では電子媒体CHINA 3のものを公開している。後者は、例えば『雑誌記事索引』で、近年はただ電子テキスト版のみを公開するようになっている。

重複を避けるため、以下で説明する。

一、関連する総合文献目録

関連する総合文献目録の内、規模が大きく、影響力が強いものとしては以下の数種がある。

一、『東洋学文献類目』〔一九三四年以降〕

『東洋学文献類目』は、一九三四年から一九六〇年は『東洋史研究文献類目』（東方文化学院京都研究所編纂）と称し、一九六一年、一九六二年には名称を改め『東洋学研究文献類目』とした。京都大学人文科学研究所付属東洋学文献センター（一九九八年に「漢字情報研究センター」に名称を改める）編纂。『東洋学文献類目』は各国の学者による「東洋学」に関する研究の主要な文献を収録している。この目録はほぼ毎年一巻が編集、出版されている。それぞれの巻は「日本・中国・朝鮮文」、「欧文」（ロシア語を含む）、「著者索引」の三つの大きな部分に分かれており、「日本・中国・朝鮮文」、「欧文」はそれぞれ更に論文と著作に分かれている。『東洋学文献目録』の項目は「歴史」、「地理」、「社会」、「経済」、「政治」、「宗教」、「法制」、「学術思想（附教育）」、「科学」、「文学」、「芸術」、「考古学」、「金石・古文書学」、「民族学」、「言語文字学」、「書誌学」、「雑纂（附革命文物）」、「学会消息」などおよそ一八項目に分かれており、各項目は更に細目に分かれている。「文学」の項目には中国古典文学、現代文学に関する研究の論著目録が収められており、その細目は以下の通りである。「通論」、「騒賦」、「詩文」、「詞」、「曲」、「小説」、「現代文芸」（「通論」、「作家」、「小説」、「詩詞」、「戯劇」、「映画」、「雑技」、「散文」、「児童文学」）。人力と財力に限りがあるためと思われるが、『東洋学文献類目』は主に京都大学人文科学研究所に毎年収められる図書、雑誌に基づき編纂さ

れる。その結果、どうしても選択せざるを得なくなる。一九八五年を例にとれば、「日本・中国・朝鮮文」の部分には、日本語の雑誌三九八誌、中国語の雑誌二一九誌、朝鮮語の雑誌一四誌、論集一四種を収めているが、実際にこの年に出版された「東洋学」に関する三言語の雑誌は少なくとも数千種類は下らないであろうし、論文集も一四種類に止まらないであろう。だが、たとえそうであったとしても、『東洋学文献類目』が特色ある文献目録であることに変わりはない。

二、『雑誌記事索引』「一九四八年以降。一九八五年以降は電子ネット版がある」日本国立国会図書館編纂。

『雑誌記事索引』は日本国内外で出版された日本語の学術雑誌と、日本国内で出版された欧文雑誌上に発表された論文を収録しており、内容は人文社会科学、自然科学など多方面の内容を含んでいる。「人文社会編」の項目は以下の通りである。「政治」、「行政」、「法律」、「司法」、「経済」、「経営」、「産業」、「社会」、「労働」、「教育」、「運動」、「歴史」、「地理」、「哲学」、「心理学」、「宗教」、「芸術」、「芸能」、「文学」、「語学」、「学術」、「文化」。この索引は創刊以来、採録雑誌の範囲が拡大し続けている。一九九六年以降は採録雑誌数が飛躍的に増大した。二〇〇〇年になると、採録雑誌は九〇〇〇誌余りに達した。二〇〇四年になると、採録雑誌は約一〇〇〇〇誌になる。採録された雑誌の総数は一五五九八誌にもなる（そのうち、採用され続けているものは九六七三誌、停刊になったもの、採録中止になったものは五九二五誌）。『雑誌記事索引』は現在、日本国内で最大の雑誌論文を収録しているデータベースである。日本の学者による中国古典文学研究に関する論文についても、現在、最も完備したものである。

三、『日本中国学会報』「学会展望」　日本中国学会編。

『日本中国学会報』は日本中国学会の会報である。一九四九年以来、毎年一冊が出版されている。主に日本中国学会の会員が中国の文学、歴史、哲学（日本、朝鮮の伝統的な漢学も含む）について研究した論文を発表している。毎号、後に一つのコラムが設けられており、それが「学会展望」である。このコラムは「思想・経学」（あるいは「経学・思想」、一九八〇年度、第三十三集からは「哲学」に改められた）、「文学」、「語学」の三項目に分かれており、世界の主要な国に於ける中国の人文社会科学についての現状と成果を総括している。第一集から第八集の「学会展望」では、各項目は学術権威、もしくは有名大学の中国文学研究学科が総括の文章を執筆していた。一九五六年度、第九集の「学会展望」より、総括の文章以外にも、各国の各分野に関する研究文献を論文・著作ともに収録し始めた。「文学」の項目の体裁は「日本文」、「中国文」、「朝鮮文」、「欧文」の四部分よりなる。各項目の文献目録の収集、整理及び、総括執筆の作業は主に一つの大学の中国文学研究学科が担当している。資料収集面などの困難から、各集の「学会展望」（ここでは「文学」の項目に限り述べる）が収めている論著目録はあるものは欧文部分が欠け、あるものは朝鮮文が欠けており、後のものになると、ただあっさりと日本国内で出版、発表された著作と論文だけが収められるようになった。

四、『文学・哲学・史学・文献目録　―Ⅲ―　―東洋文学・語学篇―』京都大学文学部吉川幸次郎、倉石武四郎等編著。一九五四年、日本学術会議刊。

本書は一九四五年八月一五日から一九五三年一〇月三一日の間に日本で発表された中国文学、言語学を中心とした

東洋学に関する研究文献を収録している。その「中国文学」の部には一三項目が施けられている。即ち、「総説」、「先秦文学」、「漢代文学」、「三国六朝文学」、「唐代文学」、「宋代文学」、「金元文学」、「明代文学」、「清代文学」、「現代文学」、「比較文学」、「日本漢文学」、「学会展望」である。それぞれの項目は更にいくつかの細目に分かれており、例えば、「総説」の下には一一の細目がある。即ち、「文学史」、「通論」、「詩論」、「散文論」、「小説論」、「童話」、「民謡」、「諺」、「方言文学」、「雑戯」、「文学教育」である。

五、『全国報刊索引数據庫』〔一九五七年以降〕

このデータベースは元の名を『中文社科報刊篇名数據庫』（CD版）といい、一九九三年、中国国家文化部が立案し、上海図書館が請け負った巨大科学技術プロジェクトである。『全国報刊索引数據庫』は紙媒体の『全国報刊索引』を基にしている。但し、定期刊行物の収録範囲は紙媒体のものに比べて、より拡充されている。二〇〇〇年以降、名前を『全国報刊索引数據庫・社科版』に改め、同時に『全国報刊索引数據庫・科技版』を公開している。二〇〇二年にはウェブ版を公開している。『全国報刊索引数據庫』は定期刊行物約八〇〇〇種類、新聞二〇〇誌余りを収録しており、中国大陸の郵便、非郵便の刊行物を基本的網羅している。内容は哲学、社会科学、政治、軍事、経済、文化、科学、教育、体育、言語文字、文学、芸術、歴史、地理などの各分野に亘っている。各項目は主要な刊行物を全て採録し、主要でないものは選択して収録するという原則がある。データは一九五七年より現在に至るまでを収め、累積データ量は八〇〇万項目余りもある。更に、毎年ほぼ五〇万項目追加される。『全国報刊索引数據庫』は現在のところ、中国大陸の超大型論文文献データベースの一つであり、一九五七年以降に中国大陸の学者が中国古典文学につい

て研究した論文を最も多く収録している。

六、『復印報刊資料索引数據庫』［CD版、一九七八年以降］中国人民大学書報資料中心編制。

このデータベースは一九七八年以降に中国大陸の主要な刊行物に発表された論文の目録であり、三九七万余りの項目がある。『復印報刊資料』シリーズが毎年転載した論文の目録と、まだ転載していない論題を「マルクス・レーニン主義」、「哲学」、「社会科学総論」、「政治」、「法律」、「経済」、「文化」、「教育」、「体育」、「言語」、「文芸」、「歴史」、「地理」、「科技」、「出版」など百余りの専門テーマと分野に分けて編集している。そのうち「文芸」類の「J2　中国古代、近代文学研究」は中国古典文学に関する論文の目録を収めている。このデータベースも現在、中国大陸の超大型論文文献データベースの一つである。

併せて、「『復印報刊資料』全文数據庫」がある。このデータベースのデータは『復印報刊資料』シリーズ［一九九五年から現在まで］の全ての原文を収め、その内、いくつかのテーマは創刊年度まで遡っているものもある。情報源は人文科学と社会科学の分野に関する中国大陸で公開出版された刊行物を網羅している。

七、『全国短期大学紀要論文索引』［一九五〇年以降］図書館科学会編集。

日本全国の国立、公立、私立の短期大学は数が非常に多く、しかも、その多くは自らの研究紀要（研究年報、論叢、論文集などを含む）を発行し、各分野（人文社会科学、自然科学など）の研究成果を発表するという体裁をとる。『全国短期大学紀要論文索引』はこれらの成果を集めたものである。一九五〇年から一九七九年までを一冊（他に別

冊あり)、一九八〇年から一九八四年までを一冊にまとめ、一九八五年以降はほぼ毎年一冊を編集出版している。毎集、分量にばらつきはあるが、中国古典文学に関する研究論文が収録されているので、軽視してはならない。

八、『新編東洋学論集内容総覧』川越泰博、荷見守義編著。

風響社。一九九七年出版。本書は明治元年(一八七九年)から一九九六年の間に、日本で出版された「東洋」文史哲の研究に関する七〇二種の論文集に収められた論文を収録している。論文集は五十音順に配され、各論集について、始めに編者、出版元、出版時期について説明がなされる。続いて、論文集に収められている論文が掲載順に並べられている論文目録があり、当該論文が論文集の何ページに掲載されているかを明記している。中国文学研究に関する論文集としては『吉川博士退休記念中国文学論集』、『小尾博士退休記念中国文学論集』、『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』、『中国文学論集(吉川幸次郎編)』などがある。ただ、残念なことは個人論集が収められていないことである。

二、専門文献目録

専門文献目録は非常に多くのものがある。ここでは規模と影響力が比較的大きい数種類を例挙するに止める。

一、『中国古典文学研究論文索引』[一九四九年〜一九八五年] 中国社会科学院文学研究所図書資料室編。

中華書局が一九七九年から一九八八年にかけて出版。五冊。本索引は一九四九年から一九八五年までの台湾を除く

中国の新聞、雑誌と大学、専門学校の学報、集刊、叢刊上に発表された中国古典文学研究の論題を収めている。また、作家と関係のある政治、哲学に関する論文、資料の題も若干収められている。本作品は全体として「概論」と「作家作品研究」の二つの大きな部門がある。「概論」の下には「文学遺産継承問題」、「文学史問題」、「文芸理論批評問題」、「詩詞曲賦」、「散文」、「小説」、「戯曲」など一〇項目が設けられており、各項目は文章が発表された時間の順に、配列されている。「作家作品研究」はまず、作家・作品の属する時代の前後に従い、「先秦」、「両漢」、「魏晋南北朝」などの項目に分かれ、各々の作家・作品は更に、ほぼ文章が発表された時間の前後によって、配列されている。

二、『中国文学研究文献要覧（戦後編）』［一九四五年～一九七七年］石川梅次郎監修、吉田誠夫、高野由紀夫、桜田芳樹編集。「二〇世紀文献要覧大系」叢書の第九種。一九七九年一〇月出版。

この要覧は三部より成っている。即ち、「研究文献の利用案内」、「文献目録」、「索引」（事項、人名、作品名、書名、著者名の索引を含む）である。更に収録雑誌名の一覧が最後に付されている。「文献目録」が全体の中心となる部分であり、一九四五年八月から一九七七年一二月の間に日本で発表された中国の古典文学、現代文学の研究文献（著作、論文、書評、書誌、記事などを含む）が要点を押さえて収録されている。この要覧は現段階では二〇世紀の日本の研究者による中国文学研究文献を最も多く収めた専門文献目録である。その資料の主な来源は本論ですでに述べてきた日本で発行された関連する総合文献目録、例えば『東洋学文献類目』、『雑誌記事索引』などである。

三、『中国文学論著集目』［一九一二年～一九九〇年］台湾国立編訳館主編。五南図書出版公司、一九九六年出版。

『中国文学論著集目』には正、続の二編があり、一九一二年から一九九〇年までに（正編は一九一二年から一九八一年、続編は一九八二年から一九九〇年）、中国、日本、韓国、欧米の学者が発表した中国古典文学関係の研究文献資料、計一一一二三種が収められている。これらの研究文献資料は様々な分野の論文、専門書を包括する。例えば、「専書」は専著、校注、翻訳、索引、資料、彙編などを含む。正、続編はどちらも王朝により七つに分けられている。即ち、「通代」、「先秦両漢」、「魏晋南北朝」、「隋唐五代」、「両宋」、「遼金元明」、「清代」である。それぞれは文体と文献の性格によりいくつかの項目に分けられている。例えば「通論」、「詩文」、「小説」、「戯曲」などである。各項目は更に、「中文」、「日文」、「韓文」、「西文」の四部に分かれ、関連する文献資料を分類して収録している。これは今までに発行された中国古典文学研究文献資料を最も多く収録している専門文献目録である。

四、『詞学論著総目』〔一九〇一年～一九九二年〕林枚儀主編。台湾中央研究院中国文哲研究所籌備処、一九九六年刊。

『詞学論著総目』は一九〇一年から一九九二年までの間に、中国、日本、韓国、シンガポール、欧米、ソ連・ロシアなどの各地で出版された詞学の研究文献資料を収録しており、二四九八九項目ある。これらの文献資料は専著、論文、札記、随筆、翻訳、序跋などの様々な分野の著作と文章を含んでいる。『詞学論著総目』に収められている文献は内容により「詞学総論」、「詞籍」、「詞学雑著」、「詞家と詞作」の四つの大きな項目に分かれている。「詞学総論」の下には「総述」、「特質」、「起源」、「流変」など、二〇細目が設けられており、詞学理論に関する文献資料が収められている。「詞籍」には「叢編」、「合集」、「選集」、「書目」、「辞典」、「詞学期刊」、「論文集」などの文献資料が収め

られている。「詞学雑著」には「札記」、「随筆」、「翻訳」、「序跋」、「研究概況」などの文献資料が収録されている。「詞家と詞作」は中国国内外の歴代（近現代を含む）の詞家、詞作の研究文献資料を収めている。『詞学論著総目』の後には八種類の付録が付いており、併せて使うことができる。本総目は現在のところ詞学文献を収めた最も完備した専門文献目録である。

五、『日本清末小説研究文献目録』樽本照雄編。二〇〇二年一一月刊。

樽本照雄編の『清末小説研究資料叢書』の第一種である。本書は一九〇一年から二〇〇一年の間に日本で発表された一四〇〇本余りの清末小説に関する研究論文が収められている。

以上の検討により、次のことが分かる。

一、日中両国の学者は異なる目的のため、限られた条件の中で、多くの形式や収録量の異なる中国古典文学研究の文献目録を編纂した。目録はあるものは専門文献目録であり、あるものは総合文献目録に含まれる。またあるものは論文のみを専門に収め、あるものは著書についても収めている。あるものは全体を網羅しており、また、あるものは文体、作家、作品のみを収めている。あるものは通史を扱い、あるものは特定の時代のみを扱う。あるものは紙媒体、あるものは電子媒体である。それぞれに特色があり、それぞれに価値がある。

二、中国と日本の学者は前世紀以来の中国古典文学の研究成果を総括するために大規模な作業を行い、専門文献目録は勿論、関係する総合文献目録も、みな程度の違いこそあれ、各国の中国古典文学研究者に便宜を提供し、中国古典文学の研究に大きな貢献をしている。

三、二〇世紀以来の、中国古典文学の研究領域に於ける成果は豊富であり、しかも、多種多様である。ところが、現在のところ、一〇〇年余りの中国古典文学研究の成果を全面的に網羅した専門文献目録はまだない。

このことに鑑み、中国復旦大学古籍研究所と中国古典文学研究センターは中国教育部の支援の下、二〇〇〇年より『中国古典文学研究文献総目』の編纂作業を開始した。『中国古典文学研究文献総目』は各国の中国古典文学（近代文学も含む）の各分野の研究文献を網羅することを目標としており、その規模は膨大なものである。現在のところ、中国語の二〇万項目近く、約一〇〇〇万字分がすでに完成しており、現時点で最大の中国古典文学専門データベースといえるであろう。日本語、朝鮮語の資料収集作業も基本的に完成しており、英文の資料収集作業が目下行われている。二〇〇七年には完成できる見通しである。『中国古典文学研究文献総目』の全ての作業が完成するのは二〇一一年の予定である。

本論で直接参考にした文献は、本文中で紹介した目録や著作であるので、文末に逐一挙げることはしない。

本論は二〇〇六年十二月十二日に開催された関西大学中国文学会の講演会における銭振民教授の講演内容に基き、銭氏ご自身が加筆修正された原稿を翻訳したものである。